

UDL

10

vol.311

October 31st
2021

設計者と言葉

- p.2-3 都市デザイナーと言葉
- p.4-5 ランドスケープデザイナーと言葉
- p.6 研究室新メンバー自己紹介

設計者と言葉

「これからの時代には、単に変革期を乗り越えるためというだけでなく、
複雑化する社会と人間の関係を理解し、もっと日常を楽しむためにこそ、
言葉を役立てることが大事ではないだろうか」

—隈研吾 + 小淵祐介『T_ADS TEXTS 02 もがく建築家、理論を考える』

一言で言えば、設計とは形を決める営みである。それゆえ全てを形に委ね、言葉では多くを語らない設計者もいる。時として形は言葉以上に語りかけてくることは確かである。しかし、社会をどう理解するか、人間とは何か、我々はどこへ向かうのか — これらを語るには言葉の力を借りることも

有効なのではなかろうか。本稿では都市デザイン研究室の教員でありまた設計者でもある永野真義先生と宮城俊作先生それぞれの著作の内容を踏まえて議論のテーマを設定し、それらを巡る問いを投げかけた。形を操る者たちの語る言葉から、どのような世界が見えてくるのだろうか。

議論の出発点とした先生方の著作

都市建築 TOKYO

都市建築 TOKYO 編集委員会 編著
鹿島出版会 2021/09 発行

出版社による内容紹介

「日本初の超高層霞が関ビル竣工から約 50 年間に大きく変貌してきた東京の、建築、都市、環境分野における都市史。「東京都区部にあり、時代の公益的な思潮を切り拓く建築」と定義された「都市建築」。これまでの建築の超高層化の経緯とこれからの都市建築の在り方を探るべく、都市計画や建築設計の実務者の実務的挑戦を紹介する。」



ランドスケープデザインの視座

宮城俊作 著
学芸出版社 2001/06 発行

出版社による内容紹介

「ランドスケープデザインという言葉の普及は、イメージの拡散と様々な葛藤を現場にもたらし、実像は今一つ掴みきれない。そこで、8つのキーワード「造園、モダニズム、素材、エコロジー、アート、コラボレーション、制度、風景モデル」から、気鋭のランドスケープアーキテクトが、そのプロフェッションの現状と可能性に迫る。」

都市デザイナーと言葉

テーマ：「都市建築」「人間性の回復」「新たな価値観」

話し手 永野真義先生
聞き手 UDLM 編集部
開催日程 2021年10月8日(金)
開催場所 工学部 14号館 906号室

都市建築

—「都市建築」という言葉に込められた意味をご説明いただけますか？

今の東京をつくっているのは良くも悪くも新自由主義がベースの建築群であって、林昌二が「その社会が建築をつくる」と語ったような、社会のニーズがつくる建築形態というのが前提としてできてしまっている。

僕が学生の頃からみんな、本当に超高層が建ち続けているのか、次に何ができかってことを考えながら眺めているんだけど、ゆるぎないところもあって。

設計者たちは、おおよけに資する意味・方法・デザインを新しく打ち立てようとチャレンジしてきた。そうしたせめぎ合いを背景に持つ建築を、この本では「都市建築」と呼んでいます。

社会が建築をつくる時代になってから都市建築が東京をどう変えてきたのかを理解しないと、その先にいけないと思うんです。

—都市建築の時代に都市デザインができることは何でしょうか？

群としてのデザインでしょうね、基本的な考え方としてあるのは。建物一つや敷地一つではなくて複数敷地や複数建物で魅力を創出するときの方法は何なのか、ということに尽きてくるよね。

現在進行形の例として、溜池山王から環状二号线まで連なる軸線を再開発を連鎖させながら緑の溢れるエリアにしていこう、みたいな大きい話もあるでしょ。そのようなときに一つ一つの都市建築がどうエリアデザインに貢献できるかを考えることって大事だと思う、都市デザインの姿として。

人間性の回復

―都市における人間性について触れられていますが、人間性とその回復とはどのような意味なのでしょう？

一意的に定義できるものではないけど、その時代に合わせてひとりひとりが向き合うべき普遍的な問いであると思う。例えば土地と人の繋がりを考える、その土地に由来したものでその土地に住む人の家をつくる、みたいなことは足りてないよね、今の社会は。

地場のものを使うとか、どの材をどこにどういう作法で使うとか、適材適所で使うとか、それでも残るものは燃料にするとか、**本当は人間が木という素材を通じて土地とつながる視点がある。そういう価値に気付いていないのは人間性回復の機会を失っているんじゃない。**

その土地の風土とか材料や構法も空間体験としての日本的なものに繋がる可能性がある。そういうものを繋ぐ一つの象徴として都市空間が存在するともっといいよね。木質というテーマはそのためのヒントがある気がして、大事だなと思っている。

―建築や都市はすぐには変わりにくいものですが、今後、いかにして都市で人間性は回復されるのでしょうか？

そもそも人間だけでいいのか、というのはあるよね。3年くらい前に研究室に見学に来た高校生に「エンカルな都市デザインってないんですか」って聞かれたことがあって。その時は生態系を回復するための都市のデザインの話をしたんだけど、けっこう本質的な問いを含んでいる気がしました。

「エンカル」、つまり人間として正しくありたいという価値観が出てきている。正しいとは何か、は色々あるけど、みんな**正しくあることが自分の人間性を担保してくれる**というか、生きててよかったという感覚を得られるんだよね。

人間として正しくありたい、ということが今のライフスタイルの新しい価値観だとすると、徐々に追従する可能性があるんじゃないかな、都市というものが。変わるのには時間がかかると思うんですけど、確実に変わっていくんじゃないかと思うんです。

新たな価値観

―個々には丁寧なデザインや面白い取り組みはありますが、それがスケールする方法論はあるのでしょうか？

様式というものがあったよね、モダニズム以前は。様式というのはある種のデザインの形態がスケールされていたわけで。今の我々からしたらあまり理解できないのだけれど、それは**こういうものが良いと思える共通の価値観があった**からこそ可能なわけだね。

じゃあ今の価値観は何なのかということになってきますよね、結局のところ。価値観を変えていくような建築をちょっとずつでもつくっていきけるか、ということになっていくんじゃない。

例えば公共空間再生ブームのようになってきたのはタクティカルアーバニズムのような地道な活動によって楽しい外・広場・街路がまちにとって大事だということが少しずつ浸透してきたから。価値観としては一部のデベロッパーにまで確実に浸透したと思います。

―それでもやはり、価値観が実空間でもスケールしてほしい気持ちがあります。

価値観に影響するような空間をつくらうよってことじゃない、そこは。いつも言ってるんだけどね、世に問うものをつくらうって。卒業設計くらいからはそれがテーマになってほしいよね。

今の都市建築は各種諸制度によってできている。だからこそ、そのルールを一つ変えたら一気に都市のありようが動く可能性ってありますよね。形そのものは単純だけど、更新のルールが変わることで風景が変わるとか。そういう方向も大事だと思うんですよ、世に訴えかけという意味では。形だけが全てではないので、**どういう方向に価値観に影響させたいのか**っていうところは議論したいですね。■



ランドスケープデザイナーと言葉

テーマ：「デザインと言葉」「風景を巡って」「職能のこれから」

話し手 宮城俊作先生
聞き手 UDLM 編集部
開催日程 2021年9月25日(土)
開催場所 中宇治 Yorin イベントスペース yorai

デザインと言葉

— デザインの本質と言葉のもつ意味の乖離はなぜ起こるのでしょうか？

ものをつくと何らかのかたちで周りに影響をもたらすじゃないですか。そこで説明責任が発生したときに、どうしてもレファレンスとして使うものがでてきます。でも、**ものをつくっていく論理と説明の論理は違う**でしょう。そこでイメージの矮小化が起こってきます。

あとスケールを矮小化することはあると思う。書籍で触れたビオトープの話とか、スケールの問題ですね。**ものすごく広域的な環境の構造として、あるいはその関係性の問題として考えなければならぬのに、それを部分として語っちゃう**ところがあります。それは私も反省しているところがある。

グリーンインフラもまさにその話。「インフラ」と言っている以上、一つの系やシステムとして繋がっていないといけないし、パフォーマンスが担保されてなければならない。それが今は実体として無い。

— デザイナーは自らがコントロールできる範囲を超えて言葉を語ることが多い気がします。その乖離はどのように埋められるのでしょうか？

デザインへの落とし込み方はやってみて模索するしかないと思う。ひどい時でも思っていることの2割か3割できればいいわけよ。**ここは死守するところだけはちゃんと**。それはたぶん施主には言わないのだけれど、**そこに意識をもってやっているかが決定的**なんだと思う。



風景を巡って

— 「風景モデル」という概念についてご説明いただけますか？

私たちの親の世代までは、ある世代に共有されている美のモデルってあったと思う。風景が動態ではなく固定されたもの、その図像がある意味でいうと風景モデルです。**それはその人たちがどういう出自でどこでどういう暮らしをしてきたかということにつながってくる**ことがあるんですよ。

私の世代より少し前までは個人の誤差よりもおしなべて共有されているもののほうが強かったはずですが、それが現代では多様化していることは間違いない。今の世代はそのような固定化された風景モデルは存在しないと思ったほうが当たり前。どこで生まれ育ったかによっても違うけど、その狭間にいるのが私たちの世代です。

— 風景がモデル化できたとしてもそれは記号に過ぎず、設計もそのレベルでしか語れなくなる気がします。

もちろんそうですよ。そこに政治的な意味が纏わりついちゃうのも事実。でも**そこに何か潜ませておく**というか、**仕込んでおくことがポイント**でしょう。

具体的なディテールの形を決めなければいけないスケールになったときに、私は「これが絶対」という主張を絶対にしないんですよ、デザイナーとして。描くよ、だってつくるためには図面は描かなきゃいけないから。でも「これが絶対」と思っている人は描いていません。それを言葉で説明するのもしらない。

つまり「**そこまで気をまわしてやることなの？**」ってことですよ。そういう風にやったことを恣意的な意図をもって使う人がいるわけですよ。その人たちの顔だけを見ていていいのか、ということですよ。

職能のこれから

— 普段からもお話しされていることが、職能と職域はどういう関係にあるのでしょうか？

私は大学にしながら教育研究をやっている、一方でプロフェッショナルなデザイナーとして仕事している。職域が違うわけですよ。**職能は属人的だけど、その場所その場所で職能の発現形が変わる**と思うんです。職能が発現した先に職域が形成される。或いは職域のなかで発現形が変化する。

職能につきものの「職能倫理」という言葉があるでしょ。倫理体系と技術体系は必ず重なってくるところがある。これからはその部分がけっこう問われると思うんですよ。寄って立つものの範囲が凄く広がってきているから。**それを一人の人格のなかで上手く昇華できるように**ならないと駄目なんじゃないですか。

— 技術体系や倫理体系はどのように身につけるのでしょうか？

意識していないと駄目でしょうね。一つ一つの仕事のなかで、強く。特に技術体系に関して言うと、チャレンジすることだと思う。これまでの技術をそのまま当てはめると、デザインのプロセスがスッと流れてしまう。時間のかかることですが、それを前提に常に（技術体系を）拡げているつもりです。

— 今後、特に日本で職能と職域の関係はどのように変化するのでしょうか？

流動化すると思いますよ、私は。流動化せざるを得ない。職能のもっているダイナミズムというかパワーみたいなものを特定の職域のなかで最大限、引き出せるような仕組みにその職域自体がなっていないと、もうその職域なり企業なりの寿命は尽きちゃう。

或いは一つの企業のなかでも、今まではピラミッド構造だったのが、同じ企業に勤めていてもそういうのとは違う役回りをする人が出てくると思いますね。そうなった人はそこを離れても他のところでやっていける。

その職域のなかでしかクリエイティブ
或いはプロダクティブに動けないという
のはもうまずいんじゃない。そこを外れ
ちゃうと役立たずになっちゃうから。そ
うならないように、職能は自分でつくる
しかないですね。

今、社会は大きな転機でしょ？ 大きいからそんな一遍には変わらないけど、向かっている方向が徐々に徐々に変わっている。いいよね、これから面白いと思います。**自分が置かれたその状況を楽しまない**と。■

言葉を聞いて

世代や設計の領域は異なるものの、永野先生と宮城先生で共通する言葉が語られることもあった。二人の言葉は私たちにどのような問いを提示するのか、取り上げきれなかったインタビュー内容も混ぜながら考えてみたい。

クライアントという界面

宮城先生は設計者の第一の役割はクライアントの利益を代表することであるとし、ディテールの形などは無理強いせず施主に委ねるという。永野先生も「実際に建築をつくるということは、設計者という立場でいうと、クライアントが共感しないことにはその先にいるユーザーを共感させられない」と指摘する。プロジェクトなどで私たちは直接ユーザーと触れることが多いが、職業人となればクライアントの要求を満足させつつ、いかにその先のユーザーにまでアプローチできるかが肝要となるのだろう。

土地と結ばれること

人間性の回復に関する議論において、土地の風土や自然の循環に人が接続できる建築物や都市空間の設計を模索しなければならないと永野先生は述べている。同じく宮城先生も人々の生活とその土地の物質循環が建物を介して出会うことの重要性を書籍で指摘している。このような先生方の姿勢は、土地との縁を切ることと概念的な予定調和を目指したモダニズムへの反省だともいえる。工業化や経済合理性の追求などが更なる追い打ちをかけた土地と人の断裂を、設計という営みは取り持つことができるだろうか。

変化の時代の専門性

時代は向かう方向を転換しつつある。永野先生の言う「人間として正しくありたいという価値観の萌芽」は資本主義や民主主義の現状を変える力をもつ。宮城先生の言う「風景モデルの多様化」や「職能と職域の流動化」は多様な生き方の可能性に直結する。確かな技術体系と倫理体系を身に着けつつ、それを自己の中で昇華し新たな職能を創造すること。その職能を通して世の価値観をより望ましい方向へと変えられる空間を実現すること。変化の時代に都市デザインを専門とする私たちに、これらの宿題が課されたように思える。

HELLO!

NEW MEMBERS

新メンバー自己紹介

It is my honor to be a member of the Urban Design Lab. Hope we can work together well and come up with brilliant ideas.

JIN 金 盼盼 Panpan

D1

- | China
- | Zhejiang University
- | Gardening, dessert making
- | To explore the hidden story under the existing form of cities.

今読んでいる本

Title: The Remains of the Day

Author: Kazuo Ishiguro

Publisher: Shanghai Translation Publishing House

It's one of the most profoundly moving books for me. Through the perceptive character study of a retiring butler, it deeply penetrates into the turbulent period of Britain with beautiful language and heartbreaking storyline.

よろしくおねがいします。

イヤホンをしている時が多いですが、気軽に話しかけてください。

SHIBATA 柴田 純花 Ayaka

D1

- | 福井県福井市
- | 東京大学大学院都市工学専攻 / 地域デザイン研究室
- | 将棋観戦（観る将）
- | 研究に向き合い、日々積み重ねていきたいです。同時に、意気込みすぎないよう気をつけます。

今読んでいる本

タイトル：フリースラント - オランダ低地地方の建築・都市・領域 -
著者：伊藤毅（編）
出版社：中央公論美術出版

オランダ・フリースラントの11小規模都市の歴史調査成果をまとめた書籍。建築を起点に都市、都市郡、領域という積層した各スケールの分析を通して、都市史の新たな方法論の構築を目指している。

この度、10月より都市デザイン研究室に4名の新しいメンバーが加わりました。出身、興味、意気込み、今読んでいる本など、様々な面から新メンバーたちをご紹介します。（|出身地 |出身大学・研究室 |興味 |意気込み）

| China

| Beijing Forestry University (Bachelor); Seoul National University (Master)

| Golf

| To study the evolution of urban form in Tokyo and urban planning in Japan.

It is an honor to study about Japan's urban planning as a visiting researcher in the laboratory with a rich history.

今読んでいる本

Title: The New Science of Cities

Author: Michael Batty

Publisher: The MIT Press: Cambridge, MA, USA

Michael Batty establishes the direction for future urban studies by integrating theories and urban computing.



MIYAZONO 宮園 侑門 Yuto

再び、都市について真摯に向き合う研究室の一員になって光栄です。2年間よろしくおねがいします。

| 大阪府茨木市

| 東京大学都市工学科

| 気候変動対策、ランドスケープデザイン

| PJをベースに、輪講やスタジオで違うバックグラウンドのメンバーと意見を交わしたいと思います。



今読んでいる本

タイトル：Network Science

著者：Albert-László Barabási

出版社：Cambridge University Press

ネットワークがそもそもどういうものをコンセプトから説明している。ネットワーク理論が生活の中で、どのように成立しているのかが示されていて初学者が分野を知るきっかけになった。

COLUMN

BOOK OF THE MONTH



歩いて、食べる
東京の美味しい名建築
さんぽ
甲斐 みのり
エクステンション (2018)

推薦者
M2 鈴木

東京にある名建築の数々。名建築をただ巡るだけでなく、カフェやレストランで一息つくことで、きっと新たな魅力に出会えるはず。明日もこの本を片手に東京の名建築を味わうことにしよう。

WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で！
<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/a/blog/>



第2回アーツ&スナック運動開催！

上野PJでは「アーツ&スナック運動」を10月下旬の3日間にかけて開催しました。今年で2回目となる本企画では、まちの「ガイトウ」を使って多くの方に街の文化を味わっていただきました。（M2 河崎）



テガヌマウィークエンド vol.4

10/30-31にひとつながりのヌマベを目指して「テガヌマウィークエンド vol.4 ヌマベケーション」を開催！ヌマベを楽しむ拠点としてサンセットパークとヌマベキャラバンを生み出しました！（M2 鈴木）

LOOKING BACK AT OCTOBER

2-3rd	宇治	フィールドワーク
4th	上野	いけまちミーティング第4回
10th	富士吉田	アヤマの会山登り
17th	手賀沼	生きもの観察会
18-19th	みなかみ	現地調査
22-24th	上野	第2回アーツ&スナック運動
30-31th	手賀沼	テガヌマウィークエンド vol.4 ヌマベケーション

研究室会議 6th, 14th, 27th

POSTSCRIPT

見切り発車の企画だったが先生方の興味深いお話しにより何とか成り立った。先生方に感謝するのとともに、本誌が読者にとって良い刺激となれば嬉しい。（M1 若松）